

流れを読む 6

世界はゼロサムではない

荘銀総合研究所理事長 牧口 徳幸

世紀末に来てグローバル化は経済の問題を超えて、国家とは何か、それによって担保されている通貨をどう考えるべきかという鋭い問題を突きつけている。一九九八年八月のロシア国債のデフォルトは、自国通貨建てとして近代史上初めてであり、ノーベル賞学者によって運営されていたヘッジファンドLTCMを破綻させた。そして大方の識者は「ドル問題」こそ今後懸念される最大のさく裂弾という。

過去百五十年以上続いた「国民国家」は、それなりに経済的には安定していたが、逆に政治的には不安定で二度の世界大戦と冷戦という大悪行を犯してしまった。時代は変わった。人類史上初めて「地球経済時代」へと移っている。そうした目で見ないと世界を正しく認識出来ない。最近のアメリカをめぐる現象はこれまでの常識を遥かに超えている。まず対外経常赤字の巨大さである。最近は年間四千億ドルにも達し、対外累積債務は一兆五千億ドルを優に超えた。にもかかわらずアメリカへの資金流入は続いている。一方、日本の黒字は年間約二千億ドル、対外債権残高は一兆ドルに迫ろうとしている。この鏡のごとき対照性は何を意味するのか。

もつひとつの驚くべき事実は通貨の発行量である。明確な数字が公表されていないので断定し難いが、どうやらドルの対GDP比率は六〇〇%位になりそうである。日本円はほぼ一〇〇%、逆にロシアルーブルは一五%くらいという。過剰に発行されたドルはアメリカに還流しないで海外で流通している。ルーブルがGDP比過小にしか発行されていないのは、ロシアという国家が信用されていないと共に、その機能をドルが代替しているとも言える。過剰発行されたドルが還流したら、アメリカは大インフレとなり、繁栄は即座に崩壊すると警告する人が多いがそつだろつか。そつとも言い難い動きを二つだけあげたい。

一つは中南米における「ドル化」の動きである。エクアドルは本年三月、遂に自国通貨スクーレを廃止してドルにする事を決定した。アルゼンチンのメナム前大統領はドル化に極めて意欲的であった。ヨーロッパの「ユーロ」が軌道に乗って来ると、南北アメリカ力は通説とは逆に、ドルへの傾斜を一層強めて行くのではないだろうか。もう一つの動きは、九七年のアジア通貨危機でアジア経済は大混乱を起こし、二十世紀中の回復は絶望視された。しかし昨年あたりから立直りを見

せ、本年はどうやら多くの国で五〜一〇%という高い成長が実現しそうである。これはドルを中心とした多額の海外資金の流入と、多国籍企業のグローバルな活動によるところが極めて大きい。IT革命の大進展にも支えられてアジアは再び「世界の成長センター」になっていく。それは同時に、アジアの個人所得の上昇を伴いながら一層拡大された世界市場を創り出して行く。世界はゼロサムからプラスサムへと大きく動いていくのである。こうした滔たる二十一世紀への流れの中で、わが日本はどう対処すべきか。二十世紀型工業化社会では、大量生産・集中方式のメリットを追求するため一種の全体主義的傾向が支配的であった。国家の枠組みのしっかりした日本に優位に働いた。二十世紀の幕開けと共にアメリカで始まった大量生産方式は日本で完成され、日本を工業化社会の勝利者たらしめた。

しかし今、日本は成功の罫にはまり、来るべき情報化社会への大変化に不適応を起している。百五十年前の幕末・明治の大先達の気概に学び、時代の変化に対応した「大戦略」と、それを断固推し進めて行く強いリーダーシップが求められている。